

2021年12月1日

四国電力株式会社 社長 長井啓介 様

伊方原発をとめる会

抗議文

貴社は、伊方原発3号機を明日（2日）にも再稼働させようとしています。しかしながら、2020年1月の一連のトラブルや本年発覚した保安規定違反などから、安全文化不在の貴社に原発運転の資格はないと言わざるを得ません。にもかかわらず、伊方町長や愛媛県知事の承認を得た直後の、強引で性急な3号機の再稼働計画の発表に対し、満腔の怒りを持って抗議します。

「未来は変えられる 目指すは人と自然にやさしい社会 幸せが循環する街」。これは、テレビから流れて来る貴社のCMです。素敵なフレーズです。未来の子どもたちに安全安心な暮らしと環境を残すことは、今を生きる私たちの責任です。しかし、原発を稼働すれば「人と自然にやさしい社会」の実現は遠のくばかりです。原発は存在する限り、誰かが被ばくのリスクを負って働かなければなりません。地域住民は事故の危険と隣り合わせで暮らさなければなりません。こんな不条理はもうやめにしましょう。今からでも遅くはありません。3号機の再稼働は断念して下さい。

東京電力福島第一原子力発電所の事故が発生して10年半が過ぎました。原発事故は、生きる場を奪い、家族を引き裂き、人々の営みを破壊しました。被害は今も続いています。いまま故郷に戻ることができない何万人もの避難者、原発事故関連死も止まりません。その上、汚染水を海に放出しようとしています。福島の実状を見れば、再稼働などはあり得ません。

原発は事故の危険と常に隣り合わせですが、伊方では、万一の時には避難できません。私たちはこの夏、30キロ圏内の方々からお話をうかがいました。地震や土砂災害で道路やトンネルは通行不能となる恐れがあり、津波が来れば船での避難もできない。避難路は渋滞して大混乱となる。実効性の

ない避難計画に、どなたも不安を訴えていました。

また、原発を動かすと必ず出てくる「核のごみ」（高レベル放射性廃棄物）は、数万年も隔離する必要がありますが、その処理方法も場所も決まっていません。ましてプルサーマル発電で生じる使用済みMOX燃料は、乾式貯蔵施設に移せるようになるまででも100年以上かかると言われています。こんな「負の遺産」を未来の世代に遺すことに、心苦しさを感じませんか。

この10年で、電力需要は減少しています。人口減少、企業や個人の節電による需要の縮小、省エネが進み、再生可能エネルギーも大幅に拡大普及しています。危険な原発を動かす必要性はありません。

コスト面で原発に優位性がないことは、今では明らかです。地球温暖化・脱炭素対策で「環境に配慮した発電」ができるというのはウソです。核反応の段階ではCO₂を出さないでしょうが、ウランの採掘、精製、加工、運搬、発電所設備の建設、解体、使用済み核燃料の処理・処分などの各段階で、膨大なCO₂を出します。原発から出る「温排水」は海水温を上昇させ、排水口付近の生態系に影響を与えます。にもかかわらず、二酸化炭素削減を口実に原発を動かすことで、かえって省エネと持続可能で安全な自然エネルギーの拡大の足を引っ張ることになりかねません。

「未来は変えられる 目指すは人と自然にやさしい社会 幸せが循環する街」という貴社のCMは、単なる宣伝文句でなく、本気で追求するべきです。今からでも遅くない。直ちに3号機の再稼働を断念することを断固求めます。